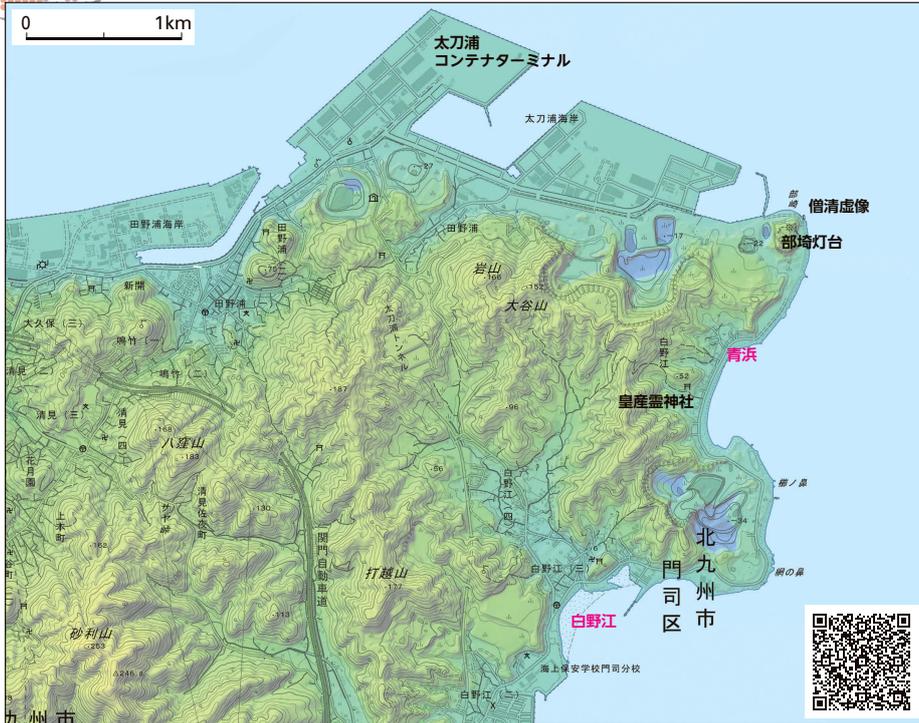


日本縦断 地理院地図の旅

第3回「海より深い露天掘り～北九州市門司区・企救半島」



地図1 北九州市門司区・企救半島北部の色別標高図
(地理院タイル(淡色地図)をベースマップに2019年10月25日作成)

1. 行き止まりで出会った「自由のおじさん」

金曜日の19時30分に東京の有明を出航したフェリーは、日曜日の早朝6時30分に新門司港へと到着する。関門橋や門司港レトロを観光するには早すぎる時間だ。そこで、遠回りになるが、企救半島の北東端にある部崎灯台を経由し関門橋方面に向かうことにした。白野江、青浜など、裏門司とよばれる海岸集落を巡るドライブ。日曜日の早朝なので、すれ違う車は路線バス1台のみ。青浜には不思議な河童像が皇産霊神社があり、部崎灯台の先では僧清虚像が海に向かい松明を灯す像があった(写真1)。しかし、道はそこで途絶えていた…。

2. 部崎で道が途絶えていた理由は？

行き止まりの先には、この先が採石場であることを示す看板があった。道路地図を見ると、約700mほど敷地内を進めば関門橋方面へと通じる道があるようだが、敷地内を通れば不法侵入。通ってきた道の大部分を引き返す必要があった。地図を確認して、南へと車を進めると、碎石が積み上がった山、水がたまった池、碎石を運搬する設備、そしてダイナミックな露天掘りの景観を見ることができた。岩石採取標識の看板を見ると、65万トンの砂岩を露天掘りで採掘していることがわかった。大規模な採石場が、海岸沿いの道路を寸断していたのだ。

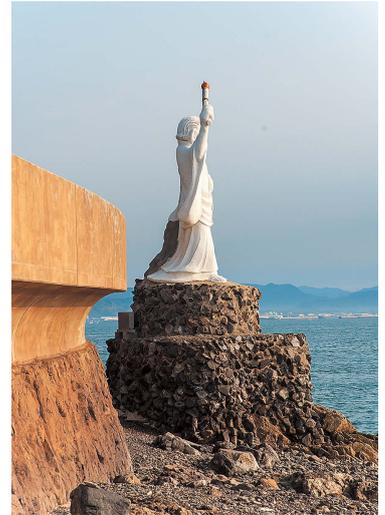


写真1 部崎灯台の先にある僧清虚像(1972年建立)
豊後国(現・大分県)国東郡出身の僧。1838(天保9)年、巡礼の途中に立ち寄ったこの地で船の難破が多いことを知り、亡くなるまでの13年間火を焚き続け、航海の安全を祈り続けた。通称「自由のおじさん」。



写真2 1960年代と現在の企救半島北部の空中写真
露天掘りにより山が階段状に大きく削られ、北部の太刀浦海岸では埋め立てが進んだことがわかる。

3. 砂岩の露天掘り～地理院地図・空中写真で確認する

地図1は、関門橋から部崎までの、門司区北東部の地形図(淡色地図)に、色別標高図を重ねたものである。東側の海岸沿いには、クレーターのよう大きな穴がいくつもみられる。ここが砂岩を採掘した跡にできた巨大な凹地で、海面下30mを下回る標高となっている。

地理院地図で1960年代と現在の空中写真と比較すると、いかに多くの砂岩がこの地域から産出されたのかがよくわかる(写真2)。古生代の堆積岩である砂岩は、埋め立ての基礎や防波堤に利用されていて、太刀浦のコンテナターミナルや北九州空港の造成などにも使われた。部崎灯台を取り巻く景色は50年の間に大きく変化した。僧清虚は密かに海の安全を祈り続けている。